9．建築物

9－2．家の建て方

鷲太郎さんの家の屋根にはササを束にしたものがついていた。農屋にはスムンクル　sumunkur（西部の人）、メナシウンクル　menas un kur（東部の人）が混じって住んでいた。スムンクルのうち、一部の人々は屋根にササの束を立てた。市橋さんの家にも立てていた。スムンクル　sumunkur　だったけれど、私の育った家には立てなかった。女しかいなかったからできなかったのだと思う。このササ束は家の屋根の東端（川上）に縛り付けてあった。あれは家を守ってくれる神様だと養母が教えてくれた。なぜササ束を立てているのかと聞くと、ニシパ　nispa（金持ち）だからだと言った。チセペンラム～チセカムィペンラッ　cise penram～cise kamuy penrat　（家の胸・棟）、チセカムイノミ　cise kamuynomi、チセノミ　cise nomi（家の神の祭り）という言葉も聞いたことがある。

［奥野ハツ氏］

屋根にササ束を付けている家があった。束は一つだった。家の東側（ヌサ　nusa（祭壇）、のある方）、ロルンプヤル　rorunpuyar　（上座の窓）の方に付ける。一年中付けていたようだ。ポンチャチャ　poncaca　と言うエカシ　ekasi　（おじいさん）の家がそうだった。今考えてみると、クマをとる人の家に付いていたのかもしれない。市橋ヨウキチという人はクマを取る人だったが、そこの家にもササ束が付いていたから。

［奥野ハツ氏］

養母に、家の屋根のササ束は何かと尋ねると、チセペンラムカムィ　cise penram kamuy（家の胸の神様）だと答えた。

ササ束はスムンクルでも余裕のある人だけが立てる。誰でも立てるもんではないようだった。

［奥野ハツ氏］

屋根のササ束を毎年取り替えていたかどうかわからない。

［奥野ハツ氏］

鷲塚鷲太郎さんの家の屋根（棟）の川上寄りの端（東はし）には、チセコロカムィ　cise kor kamuy　（家の神。静内７－９参照）と同じ形のイナウが立っていた。クマ狩の名人、市橋ヨウキチさんの家にはないものだった。他の家でも見たことがない。

［奥野ハツ氏］

9－3．家屋の内部構造

9－3－1．屋内とその配置

鷲塚鷲太郎さんの家はカヤの本葺き、まわりが板で床が板敷の家で、大きかった。

［奥野ハツ氏］

普通の家は茅葺きで、板敷きでなく、アプッキ　aputki　（すだれ）、キナ　kina　（ござ）がしいてあった。

［奥野ハツ氏］

私の住んでいた家は、カヤの段葺きだった。家の中は、土間になっていて、その上にござ（アプッキ　aputki）を敷き、さらにその上にキナ　kina　を敷いた。

［奥野ハツ氏］

家に入って左の座がシソ　siso　で、右がハリキソ　harkiso　という。ハリキソには、イトモンプヤラ　itomonpuyar　があった（イトモンプヤラのことは、シモンプヤラ　simonpuyar　とか、ハリキソプヤラ　harkisopuyar　ともいう）。家の奥は、ロッタ　rotta　よばれ、偉い人や、昔の儀礼のやり方を覚えている人しか座れなかった。

山の猟の道具は、イトモンプヤラ　itomonpuyar　から出したそうだ。イトモン　itomon　というのは、「猟に出る」ということだそうだ。

ロッタには、家の神様が祭られている。ここの窓をロルンプヤラ　rorunpuyar　という。ロルンプヤラは、神の出入りするところだと聞いている。ロルンプヤラの向いには、家から１間半ほど離れてヌサが立っていた。ノヤサルコタンの家はどれもロルンプヤラは静内川の川上を向いていた（東向き）。

窓は２尺四方の大きさで、プヤラオロプペ　puyar'oroppe　というカヤを編んだすだれが掛けてあった。

カヤで編んだすだれ（アパオロプペ　apaoroppeが窓、戸口に下がっていた。朝になったら、わたしが開けた。家に男がいなかったので、ロルンプヤラのすだれも私が開けた。朝、一番先に起きた時にはロルンプヤル　rorunpuyar　（上座の窓）を開けてからハリキソ　harkiso　（左座）のシモンプヤル　simonpuyar　（右手の窓）を開ける（図15）。

［奥野ハツ氏］

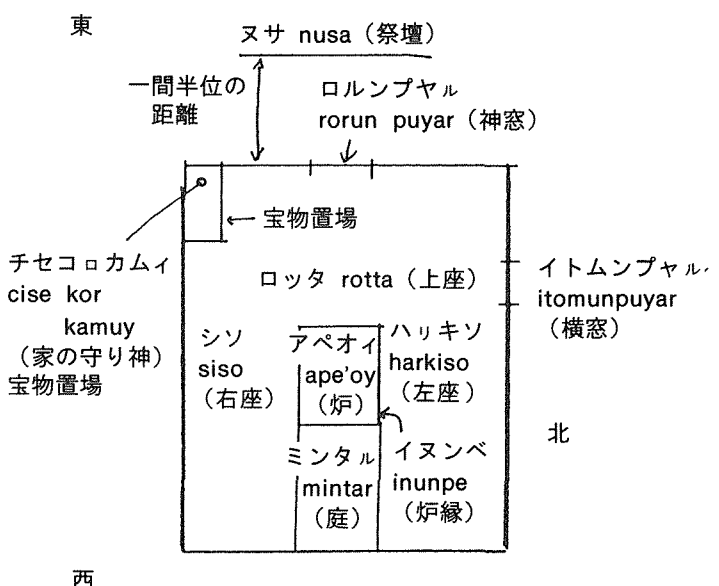

図15　奥野氏の家の配置（概念図）

昔はふとんのかわりにキナ　kina　（ござ）にくるまって寝た。

［奥野ハツ氏］

炉の下手のアプッキ　aputki　（ござ）の敷いていないところ、また、戸口の外（モセム　mosem　を出たところ）をミンタラ　mintar　という。モセム の中では、アワなどをついた。

窓、モセム　mosem　（下屋）への出入口の内側の両脇にもチセコロカムィの「お側付き」（静内７－９参照）と同じ削り掛けの束が下がっていた。これは「魔物」が家に入って来ないようにするためのものである。モセムへの出入口に下がっているものは、ミンタロカムィ　mintar　kamuy　である。この削り掛けはロルンプヤラにも下がっていたが、モセムから外に通じるところには無かった。

［奥野ハツ氏］

９－３－２．炉とその周辺

炉（アペオィ　apeoy）には、下手以外の三方に炉縁木（イヌンベ　inunpe）があった。イヌンベの材料が何だったかは分らない。

ムンヌイェ　munnuye　というのは、炉の周りの「おか」（床のこと）をはき掃除することだ。ロッタから炉の下手にごみ（コポンチ　koponci）をはいていく。ごみをモセム　mosem　（下屋）にはきだし、また、モセムもきれいにはいて戸口にだし、手ですくって畑に捨てた（オヤパ　トィカラ　oyapa toykar　したら（翌年耕したら）、コポンチ（が土の）下になって、肥料になる）。掃除は、毎朝私がした。ごみを炉にくべることはしなかった。

炉の中（アペソッキ　apesotki）の灰（ウナ　úna）は、手でかいて整えた。この時も横座の方から下手に向けてかいた。

外出するとき、寝るときは火（アペ　ape）を消した。炉の中央におき（ウサッ　usat）を集め、アペケシ　apekes「燃え尻」「燃えさし」（燃えていない部分が握れるような薪。薪のことをニ　ni　という）をその下の灰（あく、ウナ　úna）の中に差し入れる（「ヌィナ　nuyna　する」）。煙が上がっていたら、灰をかけておく。再び火を起こす（アペアレ　apeare「火を起こす」）さいは、差しておいたアペケシを抜いて、炉の中央に集めておいたウサッの上にのせ、「ガンビの皮」（シラカバの皮、タッ　tat）にマッチで火をつけた。

「鍋を（火に）かける」ことをス　ラッキレ　su ratkire、「鍋を（火から）下ろす」ことをス　ランケ　su ranke、「炉の鍋かけ」をスアッ　suat、「火棚」をトゥナ　túna　という。

［奥野ハツ氏］

９－４．屋外の構造

法事の前にヌサ　nusa　（祭壇）に行ってお祈りをした。

住んでいた家をほぐす（壊す）とき、家にある神は（窓の削り掛けなども含めて）すべてヌサ　nusa　（外の祭壇）に持っていった。これは、男の人に頼んでしてもらった。

ヌサを片付けたときは、ヌサにあるイナゥ、イナゥを支えている横木、杭などすべてまとめ

てヌサがあった場所で焼いた。これは「神に送って、お休み」ということだ。

［奥野ハツ氏］

沢に板で囲いを作り、水がじょうごを使った時のように出るよう細工がしてあった。そこに桶をあてると楽に水を汲むことができた。

［奥野ハツ氏］